



ふみお
矢野 文雄さん
(91歳・財田町)

7～11歳ごろ、太平洋戦争を経験した。招集された父が戻らぬ中、母と3兄弟で力を合わせて生き抜いた。あの戦争で得たものはあったのか……。

人の命は地球より重い。

300万人を犠牲にした憎き戦争

昭和16年12月、国民学校の初等科1年生のとき、日本国が真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が開戦しました。

当時は、トンボ草履を履き、教科書が入った風呂敷包みを背負って登校していました。各学校に設置されていた奉安殿^{ほうあんてん}の前で最敬礼をし、天皇陛下の赤子(陛下の子)であることを誓ってから授業が始まります。放課後は、運動場から、防空壕と芋畑に変わり果てた畑で農作業。夏休みの宿題は、軍馬に与える干し草作りでした。

初等科3年生になった時には、『お国のために死ぬこと

等科の5年生になりました。そのころ、高松でも空襲があり、村の上空を悠々と通過していくB29爆撃機^{爆撃機}の後ろで、日本軍の高射砲の弾が炸裂しているらしい白煙が見えました。実戦体験は、これを見たことぐらいです。

初等科5年生の8月15日、朝から空襲サイレンも鳴らず、妙に静かな日でした。夏休み中でしたが、学校に行っていました。そこで先生から終戦を知らされましたが、その後何カ月も父からの音沙汰はありませんでした。

後から聞いた話では、父は、敗戦後の満州から脱出したもののシベリア捕虜となり、そこで栄養失調から餓死したとのこと。丈夫であった父は、衰え行く自分の体から、おそ



▲父が最後に見たであろう家族写真(祖父、母、3兄弟(文雄さんは中央))

※奉安殿とは……
戦前、全国の学校などで皇室の御真影や教育勅語を保管・掲示するための神聖な施設。戦後には、ほとんどが撤去された。

※士官学校とは……
軍隊の士官(将校)を養成する軍学校。
※B29爆撃機とは……
第二次世界大戦時にアメリカが開発した、高性能で長距離航続ができる戦略爆撃機。
昭和20年7月4日未明に起きた高松空襲では、アメリカ軍の116機による106分間もの執拗な攻撃で、8万人以上が死傷する被害をもたらした。

らく死を予期したであろう、その時の無念さが痛いほど胸に突き刺さりました。
あの戦争は、罪なき300万人以上の命を犠牲にした、悲惨な人災です。亡くなった兵士たちは、死の直前に「天皇陛下万歳」と叫んだのか、ふるさとや家族の顔が脳裏に浮かんだのか……今となっては、知るすべもありません。
今の私たちにできることは、このような人類の最大の過ちを二度と繰り返さないために、未来を作る子どもたちに伝えていくことです。



ただおみ
西村 忠臣さん
(86歳・豊中町)

6～7歳ごろ、実家の神社で疎開児童を受け入れていた。当時、忠臣さんを含む4兄妹を育てながら、疎開児童の面倒を見ていた父母は、どんなに大変であったのだろうか……。

頑張るよりほかになかった。

日本中が大変なとき、皆で支え合

昭和19年の秋、祖父が疎開児の荷物をたくさん乗せた荷車を引く後ろに、約30人の学童が並んでうちへとやって来た記憶が鮮明に残っています。その日から、我が家は戦場のよう

な毎日が始まりました。疎開してきたのは、大阪市港区南市民学校の3、5、6年生の計91人と5人の先生で、我が家を含む本山周辺の旅館や寺など、5カ所に分宿したそうです。

我が家で受け入れたのは、生後6カ月の乳児と2歳児を連れて先生が引率する、3年生30人でした。学童の食事や洗濯、衣服の修繕などは、母と近所の主婦が2人で対応し



▲当時、30人程が入れる防空壕があった場所

ていました。そのうえ、母は私を含む4人兄妹の世話もしていたので、想像を絶する状態であったらと思うと思います。この時、母は『お国のために』

という合言葉を中心に支えとし、日本中が大変な時だから、頑張るよりほかになかったと言っていました。
生活はとてども厳しく、配給の食糧だけでは食べ盛りの子どもにはとうてい足らず、空腹で眠れない子どもたちは、毎晩のように夜中に台所に来ては井戸水を飲んでいました。また、お風呂には、3、4日おきにしか入れず、ノミやシラミが湧き、晴れた日には全員が裸になって衣類を干したり、這い出してくるシラミを捕まえてつぶしたりしていました。夜になると故郷や家族を思っ

て泣きわめく声に、子どもながら重いものを感じ、今でもその声は耳に残っています。

昭和20年3月に入り、6年生が卒業のために大阪に帰ってから、残った子どもたちは里心がついたのか、疎開先を抜け出すようになりました。それらの子を探しに行く祖父は、『疎開の子は不憫じゃ。親に会いたかろうに』と顔を曇らせていたのが記憶に残っています。

終戦後は、家族が子どもたちを迎えにきて次々と連れて帰りましたが、家族の来ない

半数近くの子は、9月末ごろまでいたと思います。

戦後から数十年経過したある日、我が家に疎開していたという人が訪ねてきました。

その人は「大阪へ帰りたくて線路を歩いていたが、空腹で歩けなくなったところを連れ戻された。空腹で眠れないときは、親が枕の中へ入れてくれた空豆をこっそり食べた。本山の他の場所に疎開していた3歳上の姉が、卒業式のため大阪へ帰るときに会いに来て、小豆入りのお手玉をくれたが、それもこっそり食べた。しかしその姉は、3月14日、卒業式の前夜から早朝にかけて大阪大空襲で亡くなった。そのことは、秋に大阪へ帰ったときに初めて知らされた」と、ため息交じりで話されました。

私には想像もできない半生を送ったこの方の言葉の全てに、日本の一時代が凝縮されていると実感しました。
人の生活や文化を壊してしまふ戦争はあってはならないこと、また今ある平和で安全な暮らしは当たり前ではないということを、後世に伝えていくことが、戦争体験者の使命ではないでしょうか。

決して忘れぬ、記憶を胸に





1943

航空隊へ志願した家族を送り出す
(昭和15~16年頃)



1944

上高瀬尋常小学校での学芸会
(昭和17~18年頃)



1945

上高瀬尋常小学校での体育の時間
(昭和18~19年頃)

2025

未来のアルバムは
平和と希望であふれたものに



比地小学校6年生の皆さん(令和7年)



仁尾尋常小学校へ通う子どもたち
(昭和15年)

1940



勝間尋常小学校で裁縫の授業を受ける
女生徒(昭和15年)

1941



勝間尋常小学校の授業風景
(昭和15年)

1942



勝間尋常小学校で剣道を習う男子児童
(昭和15年)

写真提供：文書館

平和な世界、祈る

比地小学校の6年生33人が、道徳の授業で、平和な今と戦争中では何が違うのか、グループで話し合いながら考えました。

子どもたちからは、『平和な今は『みんなの笑顔が溢れている、当たり前の日常』で、戦争中は『自由がなく、命を守ることで精一杯な暮らし』などの意見が出ました。

学んだ戦争の恐ろしさを周囲の人たちに伝え、今ある当たり前の日常を大事に生きることを、みんなで再確認しました。



授業で学ぶ

比地小学校6年
とみやま そら
富山 空輝さん



授業では、戦争をしても何も得ることができず、誰も幸せにならないということ学びました。僕たちは、実際に戦争を体験したことはありませんが、戦争の恐ろしさや命の尊さをしっかりと学んで、次の世代に伝えていくことが大切だと思います。

いろいろな問題があっても、戦争をせずに解決する方法を一人ひとりが考え、平和な社会が作れると思います。国や地域が違っても、相手の良さを認め合い、お互いに尊敬することを忘れずに歩いていきます。

比地小学校6年
ちかまつ たまき
近松 珠希さん



戦争は、今の『当たり前』を壊して、たくさんの人を不安にさせる悲しい出来事です。戦争を二度と繰り返さないためには、体験していない人も、みんなが戦争のつらさを理解しないとダメです。そして、何事も争い合うのではなく、協力して助け合うことで、みんなが幸せで平和に過ごせると思います。

命は、一度失ったら戻ってこない、自分の命はもちろん、家族や友だち、動物や植物の命も大切に生きていきたいです。

イベント
本で学ぶ

詫間町民俗資料館・考古館
『戦争と三豊』リニューアル展示

詫間海軍航空隊に関するジオラマの展示や反戦平和の詩人『四國五郎』展を開催します。

期間 8月13日(水)から
内容・詫間海軍航空隊の特攻隊の説明
・詫間海軍航空隊に関連する
飛行機15機の模型展示 など

▼問い合わせ
詫間町民俗資料館・考古館
☎23・6709

文書館夏期企画展

『戦後80年 戦時下の学校』

学校日誌を中心に、戦時下の子どもたちの暮らしを紹介しています。

期間 9月7日(日)まで

※月曜日、8月29日(金)は休館。

▼問い合わせ 文書館 ☎63・1010

体験談集

『太平洋戦争と三豊』

編集：『太平洋戦争と三豊』体験談集策定委員会
市内の各図書館(室)で閲覧できます。

